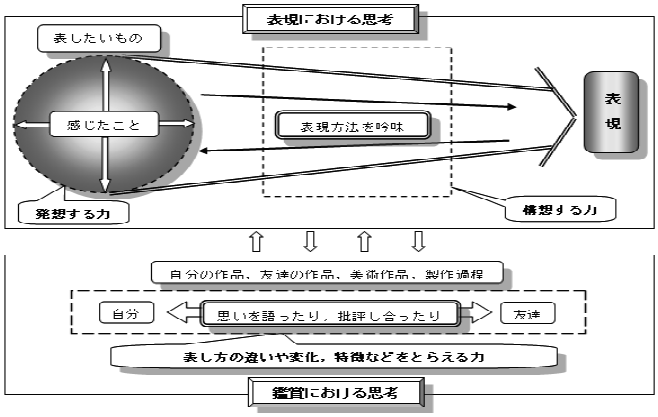
図 画 工 作 科

1　育成したい「思考力」

a　感じたことを基に，多様な観点でイメージを深めたりアイデアを広げたりし（発想する），表したいものを実現可能なものにするために，表現方法を吟味する（構想する）力
b　感じたことを友達と話し合う等して，表し方の違いや変化，特徴などをとらえる力



図画工作科では，「表現」においては，「こんなものをつくろうか」「どんなアイデアがあるか」という発想する力と，「表したいものを実現するためにはどのような方法が適しているか」という構想する力が思考の中心となる。

一方「鑑賞」においては，友達と交流しながら，形や色などについて「友達の表し方とどこが違うのか」「表し方がどのように変わったのか」「なぜそのように感じるのか」等，表し方の違いや変化や特徴をとらえる力が思考の中心となる。

（１）感じたことを基に多様な観点でイメージを深める・アイデアを広げる（発想する力）

○　イメージを深める力

イメージを深める力とは，表したいイメージを具体的に思い描く力のことである。例えば，花の絵を描くとする。はじめは概念的で記号のような花（例：チューリップ→ ）を思い浮かべる場合が多い。しかし，その花がいつ，どんなところに咲く花なのかといった「時間的」「空間的」な観点をもつことで，花やその周りの様子がより具体的になる。そのことによって，だれもが思い描く一般的な花から，自分が表したい，感性豊かに思い描いた固有の花になるのである。

第５学年「どんなカンジ？漢字アレンジ」の実践例より

【本単元で育成したい「思考力」】
選んだ漢字をアレンジするために，その漢字のもつイメージを深める力

本単元では，感情を表す漢字の中からアレンジしたい漢字を選んでデザイン文字をつくっていった。しかし，特に抽象的な漢字に対しては具体的なイメージをもちにくく，文字のどの部分をどのような形や色に変えていけばよいのかが思いつきにくい。例えば「快」という文字ならば，「気持ちいい」「すっきり」としかとらえることができず，形や色も曖昧にしか思い浮かばないことがある。そのイメージを経験とつないで語らせることで，「私は，朝起きたときの布団の中が気持ちいい。」「僕は，暖かい部屋で本を読むときです。」等の反応が出る。

このように，「朝起きたとき」「本を読むとき」など「時間」や「布団の中」「暖かい部屋」など「空間」の観点から具体的に「快」のイメージを思い描き，アレンジにつなげる手がかりを見つける力が，イメージを深める力である。

○　アイデアを広げる力

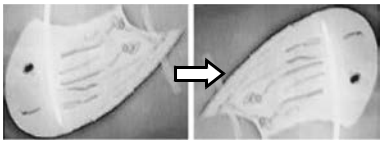
アイデアを広げる力とは，感性を働かせながら，描く対象を形や色等にかかわる観点から見つめ直す力である。例えば，無造作に紙をちぎる。すると，その紙の形が動物に見えることがある。さらに，紙を斜めに置いたり裏返したりした時，全く別のものに見えてくる。上記の花の例では，「花びらの色を変えてみたら」「大きくしてみたら」「向きを変えてみたら」等の観

点から花を見つめ直すことで，いろいろな花の表現の仕方に気付くのである。

第１学年「だんぼうるのかけらを　かみのうえにおいてみると」の実践例より

【本単元で育成したい「思考力」】
選んだ１枚の段ボール片の形の見え方から感じたことを基に，多様な観点でアイデアを広げる力

手に取った段ボール片が何に見えるかイメージさせると，「お化け」ととらえた子どもがいた。「お化け」のイメージが強く，新たな表現へと結びつきにくかったのである。そのような子どもが，段ボール片を反対から見ることに気付き，「ねずみだ。とがったところは鼻の先だ。ひげを付け足したらおもしろい。」と，形に対する工夫を見出す力が，アイデアを広げる力である。


【方向を変えて「お化け」→「ねずみ」】

（２）表したいものを実現可能なものにするために，表現方法を吟味する力（構想する力）

広がり深まった発想から表現したいものを決め，表現方法を試しながら表したいものを表現可能なものにしていく力である。「○○の色より□□の色を使った方がぴったりするかもしれない」などと，表したいことと材料や場所等の特徴，構成の美しさや視覚的な効果などを照らし合わせながら表現方法を取捨選択していくことで，表したいものが実現可能なものとなる。

第６学年「消えた！光った！不思議な絵でショートストーリー　－ブラックライトの光で－」の実践例より

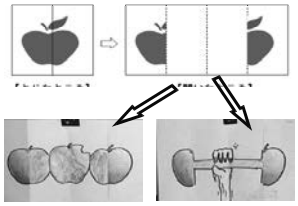
【本単元で育成したい「思考力」】
水彩絵の具と蛍光性の絵の具の組み合わせを試しながら，表したいお話のイメージに合った色の組み合わせを見つける力

本単元では，通常の光の下での見え方とブラックライトを当てたときの見え方を昼夜二つの場面として，一つの絵に表していった。最初，「閉じていたふくろうの翼が闇夜で動き出すという場面を表そう」としていた子どもは，昼と夜の場面にかく翼を同系色の絵の具を用いて表した。この子どもは表し方を試していく中で，やがて「夜の場面の翼の色を変えた方が，翼を大きく広げて，翼の裏側が見えたようになるよ。」と考えた。このような，色の組み合わせを試しながらイメージに近付ける表し方を見つける力が，表現方法を吟味する力である。

（３）感じたことを友達と話し合う等して，表し方の違いや変化，特徴などをとらえる力

鑑賞において，子どもたちは，自分の作品を改めて見直したり，友達の作品や美術作品，製作過程を見たりして，さまざまな感じ方をする。それについてつぶやいたり友達と話し合ったりする際，単に「こっちの方がいいです。」ではなく，形や色，材料，用具の使い方とつないで話し合わせることで，表し方の違いや変化，特徴をとらえる力が育つと考える。そのためには，「○○な感じを表すために□□を使ったよ。」「この部分に△△色を使っているから，…な感じがよく表れているね。」「ここを大きくかいたのは，きっと…を表したかったからだ。」など，造形的な言語を介しての話し合いが必要になる。

第４学年「ひらくとあれあれ？おりたたみ絵本」の実践例より

【本単元で育成したい「思考力」】
友達と自分の表し方を比較して感じたことを基に，その違いや特徴をとらえる力

本単元では，右図のように，画用紙を開いたとき，りんごの間に現れる形を工夫していった。途中，鑑賞の時間を設け，数枚の作例について話し合わせた。すると，「左はりんごの数が増えていて，得をしたような気はするが，変化はあまりない。」「右のように，りんごではなく手をかいてダンベルに見えるようにした方が，驚きが大きくて，おもしろい。」という反応が表出された。このように，話し合いを通して感じたことを具体的に形やその数などとつなぐ力が，違いや特徴をとらえる力である。